

〔 インタビュー 〕

元中日ドラゴンズ 球界のレジェンド

山本昌さん

「東区スモールアクションプロジェクト」では、身近で気軽に無理なくできる行動(スモールアクション)を長く継続していくことが大切です。そこで、プロ野球選手として数多くの輝かしい功績を残した球界の「レジェンド」であり、東区安心・安全で快適なまちづくり大使でもある、元中日ドラゴンズの山本昌さんにご自身の野球人生を振り返っていただきながら、長く継続できるコツや心構えについてお聞きしました。

取材日 2020年(令和2年)11月11日

山本昌さん プロフィール

「球界のレジェンド」の異名を持ち、現役32年を中日ドラゴンズ一筋で活躍した名投手。1984年にドラフト5位で入団。入団5年目のアメリカ留学を機に才能が開花。シーズン途中に帰国するとすぐ1軍に定着し、無傷の5連勝でリーグ優勝に貢献。その後はチームのエースとして、3度の最多勝に輝き、1994年には沢村賞を受賞。その後、史上最年長41歳でのノーヒットノーランを達成。2008年には通算200勝を歴代最年長42歳で達成。2015年に史上初の50歳での登板を最後に、惜しまれつつも現役を引退した。通算成績は219勝165敗5セーブ防御率3.45。現在は野球解説者、スポーツコメンテーターとして活躍中。



——山本さんは、最初からエースとして活躍されていたものと思っていましたが、中学、高校では補欠、入団後も5年間ほとんど1軍で投げる機会に恵まれなかったと聞いています。プロ野球という世界は非常に厳しいものでしたか？

私はそもそもドラフトで指名されると思っておらず、大学に進学し、その後は学校の先生にでも、と思っていました。ドラフト当日にいきなり校長室に呼ばれ、そのとき初めて中日ドラゴンズに指名されたことを知りました。18歳の少年としては正直うれしかったです。中日ドラゴンズと聞いてさらに喜び、というのも、父が中日ドラゴンズファンで、よく父とナイターを見ていたんです。それで、大学進学は決まっていたんですが、ここはプロで勝負してみようと決意しました。しかし、最初はプロのレベルの高さにびっくりで、先輩たちを見て「これは難しいかな」と。

——やはり、プロの先輩たちはすごかったですか？

一番最初にブルペンで見たのが、小松辰雄さん、鈴木孝政さん、郭源治さん、牛島和彦さん。この4人のブルペンをキャンプ初日に見たので、びっくりしましたね。正直、場違いなところに来たかなと。ただ「あきらめない」という気持ちで常にありました。いつもなにかダメでも「頑張らなきゃ」と思う気持ち。中学、高校の時も補欠でしたが、それでも頑張ってきたので、それこそ「継続する」ということを大切にやってきました。

——入団後は1軍での登板も少なく、5年目に星野監督からアメリカ行きを通告されています。

5年目は最後の年という思いでしたから、非常にショックでした。今でこそ、

野茂投手の活躍に始まり、メジャーリーグを近くに感じますが、当時は全く情報がなくて。もちろんメジャーリーグは知っていましたが、内容も分からない中、向こう(アメリカ)にキャンプに行つて、そこに置いてきぼりにされましたから、非常にショックでした。

——アメリカでは、人生を変えるような恩人との出会いもあったと聞いております。その時のエピソードをお聞かせください。

最初はアメリカのシステムも分からず、練習も全然違う。そうしたら、アイク生原さんという方が8カ月間付いてくれることになりました。当時は、何でプロ野球選手の自分にプロじゃない人が付くのかなと不思議でしたが、このアイクさんという方は本当に野球が大好きで、私がふてくされていようがなにしようが、きちんと教えてくれるんです。するとだんだん恥ずかしくなってきた、「こんな一生懸命やってくれている人がいるのに、なにやっているんだ、俺は」と。そこから気持ちを变えて頑張ろうと思いました。スクリーンボールを覚えたのもアイクさんがきっかけで、「何か覚えなさい」と言われ、大リーグの有名なピッチャーのところにたくさん連れていつてもらい、いろいろな球種を聞く事ができ、その中からヒントを得ることができたのです。

——アメリカでのチームが優勝争いをしていた中、星野監督の要請で日本に帰ることに。その時のお気持ちは？

正直、戻りたくなかったですね。ちょうどチームが前期に優勝し、プレオFを控えていました。チームの中心選手として投げていましたので、球団には「帰りたいくない、今シーズンはこっちで投げます」と言っていました。すると、

星野監督から直々に電話がかかってきて、「いいから帰って来なさい」と。逆らえる人ではありませんので「はい、帰ります」と(笑)。

——帰国後はチームのエースとなり、大活躍されました。

日本に帰ってきてすぐ、通算5年目でプロ初勝利を挙げるわけですが、今まで200勝挙げたピッチャーは皆さん3年目以内に勝つていて、プロ初勝利が5年目というピッチャーはいないんです。私が一番遅いんですよ(笑)。

——山本さんのお話をお聞きしていると、人生の転機の際にチャンスをつかりとつかんでいらっしゃる印象があります。チャンスをつかめる人になるための秘訣や心構えなどはありますか？

まあ、それまでたくさん逃したんでしょ(笑)。それこそ小さなことをコツコツやってきたから最後の最後にご褒美をもらえたという認識で思っています。チャンスをつかむために一番大事なのは「準備」だと思います。準備していない人はチャンスをもたらしたとしても、おそらく簡単には手にできない。

